

## あいさつ

病院長 島田 眞路



春、新年度を迎え、医学部では新入生を、又、病院では新しく入職した方々をお迎えして、皆様新しい気持ちで仕事を始められたことと思います。この3月から、病棟の南側には、青々とした芝におおわれた新しいサッカーグラウンドが目に入ります。ヴァンフォーレ甲府と無事契約が締結

され、選手たちが練習している姿も楽しむことができます。この医学部グラウンドでしっかりと練習して、ぜひ、J1に昇格してもらいたいものです。

昨年度、最も印象的だった出来事は、日本医療機能評価機構のVersion 6を受審し、補充審査もなく都合3度目の認定を受けたことでしょう。3月5日には、5年間の認定証もいただいたところです。600項目にもわたる厳しい審査ではありましたが、1項目も落とすことなく合格したことは、本院のレベルの高さとチームワークの良さを示しているものと喜びもひとしおです。これも、Version 6担当の久木山委員長をはじめ、武田副病院長、藤井副病院長、佐藤副病院長、鈴木看護部長、岩下副看護部長、白沢事務部長や各領域WGの委員を中心に全職員が、一致団結して頑張ったおかげと感謝致しております。ただ、いくつかの貴重なご指摘もいただいたので、謙虚に受け止め、改善していきたいと考えています。言語聴覚士の配置や褥瘡用除圧ベッドの追加購入といったできるところから早速対応しましたが、今後もご指導を受けたところは順次改善していくつもりです。

受審に際して病院長のリーダーシップが最も重要とのプレッ

シャーを受けていたので、徐々に受験生の気分を味わいました。本院は一発合格以外は合格に非ずとの皆様の意気込みを感じておりましたので私自身が一番「ほっ」としているのではないかと考えています。

この合格は、本院が理念として掲げている「一人ひとりが満足できる病院」をめざして職員一同力を合わせてチームワークよく頑張ったおかげです。本当にありがとうございました。

さて、病院長に就任して丸一年がたちました。経営的には7:1看護体制が定着し、手術数の伸び等もあり病院収入が5億円以上増加したこと、本年1月から病院敷地内禁煙がスタートし、これも問題なく定着したこと、助産師外来が発展し、院内助産施設である「よつ葉ルーム」が開所し、実際2月に3名、3月に2名(4月1日現在)のベビーが無事誕生したこと、文科省支援事業のひとつである5大学連携(山梨大、浜松医大、昭和医大、北里大、聖マリアンナ医大)の高度医療人養成事業が本院の主導で順調に進捗したことなどが印象的な出来事でした。

人事面では長年の懸案であった有期雇用職員の常勤化がようやくスタートでき、また文科省から入学定員増、医師不足のための人件費が手当されたため、診療助教として診療科等に新たに6名配分できたこともうれしい出来事でした。

この1年、その他数々の問題等がありましたが、何とか乗り越えられてきたのは皆様のご協力のおかげと感謝しております。

2年目は、いよいよ病棟再開発に向けて文科省との協議を進めたいと考えております。これも皆様のご協力なしには達成できないものです。今年度もぜひよろしくお願い申し上げます。

## 平成22年度診療報酬改定について

医事課 診療報酬請求グループリーダー 保坂 直史

平成22年度の診療報酬改定は、改定率は+0.19%(本体+1.55% 薬価等:▲1.36%)と10年ぶりのプラス改定となっています。重点課題への対応として「救急医療の評価の充実」「産科・小児医療の評価の充実」「病院勤務医の負担軽減」「手術料の適正な評価等緊急課題への対応」を始め、①がん医療②認知症③医療感染症対策④肝炎対策の推進の、充実が求められる4つの領域への評価も行われました。また、「患者から見てわかりやすい医療の実現」「75歳以上(後期高齢者)という年齢に着目した診療報酬体系の廃止」などにも取り組んだ改定です。

以上のように、今回の改定は、保険医療機関を取り巻く環境の改善及び、前回改定から引き続き、診療を受ける患者さんの立場をより重視したものとなっています。個々の医療機関は、改定の趣旨を踏まえて、医療機関の労働環境等の改善や、患者さんの立場に基づいた診療が求められています。今回の改定を機に、本院職員も病院の理念である「一人ひとりが満足できる病院」を再認識し、更なる努力をしていきたいと思っております。

なお、診療報酬改定に関する質問等がありましたら、医事課までお問い合わせください。

## 血液・腫瘍内科科長就任挨拶 = 網状赤血球を育てよう =

血液・腫瘍内科 科長 桐戸 敬太



2010年1月1日に、小松則夫初代教授の後を受け、血液・腫瘍内科科長を拝命いたしました。山梨県身延町の生まれで甲府西高等学校の卒業生です。1988年に自治医科大学を卒業。山梨県立中央病院で初期研修を行った後に、山梨赤十字病院に一般内科医として赴任し4年間地域医療に携わりました。1994年に自治医大血液学教室の大学院に入学。その後、同教室の助手、米国留学や栃木県立がんセンター勤務などを経て、2005年より山梨大学血液内科教室に勤務しております。

血液学は臨床医学の中でも、特に基礎研究と実臨床とが密接に関連する分野です。疾患の診断や治療方針決定さらには治療効果の判定にも、様々な分子生物学的手法が用いられます。また、分化誘導療法や分子標的療法など

新しい治療法がいち早く取り入れられ、しかも目覚ましい成績を示すなど、臨床医学の中でも非常に魅力的な分野です。しかしながら、血液内科医は全国的に不足しています。

血液内科では、白血病やリンパ腫の治療として大量化学療法を行います。必然的に白血球や血小板などの血液成分は著明に低下します。この状態をNadir（ナディア）と呼びます。さて、このナディアの状態から正常な造血が回復するのを待つのですが、その一番最初の兆しとなるのが若い赤血球、すなわち網状赤血球の増加です。科長として、これからの血液・腫瘍内科教室を、そして山梨県の血液診療を支えてくれる若く元気な網状赤血球たちを大切に育てていくことをまず大きな目標と考えております。

院内の皆様方からも温かいご支援をいただけますようお願い申し上げます。

## 山梨大学医学部グラウンドの使用開始式典開催

事務部長 白沢 一男



挨拶する前田学長

去る3月2日、新装なりました山梨大学医学部のグラウンド開きとなる、グラウンド使用開始の式典が挙行されました。

前田学長、海野ヴァンフォーレ甲府社長のご挨拶に続き、華やかにテープカットが行われ、続いてヴァンフォーレ甲府の選手による全体練習が開始されました。式典には山梨県知事代理の田中山梨県企画部長も出席いただき、多数の教職員、熱心なサポーターとともに山梨大学医学部グラウンドでの初練習を見学しました。

全選手・スタッフが参加してグラウンドのこけら落としとしての練習が繰り広げられたため、間近で見るプロサッカー選手の迫力ある練習風景に、見学者から盛んな歓声があがりました。

医学部グラウンドはこれまで、おもに教職員、大学ラグビー部、サッカー部、陸上部の課外活動に使用されておりましたが、最近では整備が行き届かず、やや荒れた状態となっておりました。

こうした状況の中、ヴァンフォーレ甲府と山梨大学は、医学部キャンパスグラウンドを活用した教育・研究の活性化と地域におけるスポーツの振興・地域貢献を目的とする覚書を昨年10月30日付で締結いたしました。

この覚書には、医学部キャンパスグラウンド及び関連施設をヴァンフォーレ甲府が整備したうえで大学に寄贈し、山梨大学は学生の教育や課外活動のために、ヴァンフォーレ甲府はオールシーズン使用可能な新たな練習場として、また両者が協力して社会貢献事業を行う、といった内容が盛り込まれております。

ただいま、新グラウンドは、緑の芝が春の光を浴びて輝いています。病院としても、こうして整備された環境が、患者さんの癒し空間となることに大きな期待を寄せています。このたびの山梨大学とヴァンフォーレ甲府の連携に熱い期待をお寄せいただきとともに、より一層のご支援をお願いいたします。



テープカットの様子



## 新部門長等紹介

### 病院長・副病院長

病院長	副病院長				
島田 眞路	臨床研修 病院再開発担当	労務管理・病床見直し	安全管理担当	財務管理・経営改善担当	看護及び労務管理担当
	藤井 秀樹	久木山 清貴	武田 正之	佐藤 弥	鈴木 久美子

### 中央診療部門等

部門名	部長	副部長	部門名	部長	副部長	部門名	部長	副部長
検査部	尾崎由基男	井上 克枝 遠藤 武	リハビリテーション部	波呂 浩孝		薬剤部	小口 敏夫	花輪 剛久 鈴木 正彦
手術部	石山 忠彦		血液浄化療法部	深澤 瑞也		医療福祉支援センター	端 晶彦	
放射線部	荒木 力	市川 智章 佐野 芳知	光学医療診療部	佐藤 公	大高 雅彦	卒後臨床研修センター	藤井 秀樹	
材料部	木内 博之		臨床研究連携推進部 (治験センター)	島田 眞路 木内 博之		生殖医療センター	笠井 剛	
輸血細胞治療部	岩尾 憲明		ME センター	松本 雅彦		腫瘍センター	桐戸 敬太	
救急部	松田 兼一		医療チームセンター	飯嶋 哲也		肝疾患センター	坂本 穰	井上 泰輔
集中治療部	松田 兼一	森口 武史	病院経営管理部	佐藤 弥	柏木 好志 山田 徹	口腔インプラント 治療センター	中野 佳央	
病理部	加藤 良平	中澤 匡男 弓納持 勉	栄養管理部	島田 眞路	小林 貴子	医師キャリア形成 センター	佐藤 弥	
分娩部	平田 修司	笠井 剛	安全管理部	島田 眞路	武田 正之	遺伝子疾患診療 センター	杉田 完爾	久保田健夫

### 看護部

看護部長	副看護部長			
鈴木 久美子	(業務担当)	(総務担当)	(質保証担当)	(教育担当)
	手塚 とみ江	新田 妙子	岩下 直美	五味 美香

	看護師長	副看護師長		看護師長	副看護師長
安全対策担当	古屋 塩美	村松 陽子	ICU	平野 みのり	永田 明子 渡邊 理映子 佐々木 洋子
管理夜勤	小澤 和子	伊藤 雅美	7階東病棟	杉山 千里	大門 恵美 金子 春美 青柳 しずか
情報担当	齋藤 幸美		6階東病棟	望月 恵美	三枝 栄江 島田 昌子
医療福祉支援センター	有田 明美		5階東病棟	佐藤 あけみ	三平 まゆみ 小尾 きよ美 河西 典子
緩和ケア認定看護師	井上 貴美		4階東病棟	萩原 千代子	矢崎 正浩 岩澤 久美 中柄 創和
感染対策担当	堀口 まり子		3階東病棟	花輪 ゆみ子	小泉 夫美子 竹田 礼子
教育担当	藤原 道子		2階東病棟	長田 玉枝	原 克枝 神田 藍
皮膚排泄ケア 認定看護師		金丸 明美	7階西病棟	小林 ひとみ	中嶋 君枝 牧野 基美 武田 陽子
外来・中診	小野 さつき	辻 稔 佐野 好枝 穴水 美和	6階西病棟	伏見 ます美	佐野 美樹 戸栗 宏子 大村 希依 金丸 紀子
手術部	山口 奈巳	北井 朋美 杉田 俊江	5階西病棟	石川 みゆき	深澤 紀代美 長田 梨奈 宮澤 久美
材料部	秋山 栄		4階西病棟	岡村 真由美	中澤 菊美 大芝 まゆみ 相川 真弓
			3階西病棟	杉田 節子	蓮沼 知津子 茶谷 直子 茂手木 智美
			2階西病棟	高野 和美	山本 秀美 山本 ゆかり 鷹野 美幸
			1階西病棟	神山 由美	宮澤 一恵 田中 紳子 赤池 陽子

### 事務部

事務部長	課名	課長	補佐	課名・室名	課長・室長	補佐	補佐
白沢 一男	総務課	市川 雅一	小林 充	医事課	相川 勝則	高山 俊雄	丸山 さとみ
	管理課	佐野 靖彦	矢澤 泉	病院経営企画室	山田 徹		

## アルブミンの適正使用について - 輸血管管理料 I の取得を目指しましょう -

輸血細胞治療部長 岩尾 憲明



今般、病院機能評価(Ver. 6)の認定を無事受けることができましたが、受審後の中間報告で輸血の適正使用、特にアルブミンに関して「適正使用が十分にガイドラインを遵守したものにはなっていない」と評価されたことや、昨年の国立大学病院間の相互視察では輸血管管理料の算定ができていないと指摘されたことは皆さんご存知の通りです。では「何故アルブミンの適正使用が求められるのか」をこの機会に改めて説明したいと思います。

実は日本ではアルブミン製剤の全世界生産量の約3分の1が使用されており、その大半を輸入に依存しています。そのためWHOから「血液の国内自給」の国際的原則に従うように警告を受けましたが、まだ国内自給は達成できていません。そこで、アルブミンの

過剰使用の是正と国内自給の実現へ向けた法整備が進められ、『血液法(安全な血液製剤の安定供給の確保等に関する法律)』が平成15年に施行されました。したがってアルブミンの適正使用は国策と言えます。この血液法を根拠として平成18年の診療報酬改定で新設されたのが輸血管管理料であり、輸血管管理体制が構築され輸血が適正に実施されていることを算定要件としてFFPとアルブミンの適正使用基準値が定められています。既にいくつかの大学病院がアルブミンの使用方針の見直しを図り、輸血管管理料を算定できるようになっていますから本院でも算定は不可能ではないと考えます。輸血管管理料が設定された背景をご理解いただき、アルブミンを含めた輸血の適正化と輸血管管理料の算定へ向けて各科・各部門の協力をお願いしたいと思いますので、どうぞよろしくお願いたします。

## 肝疾患センター活動報告

肝疾患センター長 坂本 穰



国は、健康・医療政策の重点項目としてウイルス肝炎を中心とした肝炎対策を掲げています。この事業を推進するため、各都道府県に1ヶ所ずつ「肝疾患診療連携拠点病院」が設置され、山梨県では本院がその指定を受けました。本院では、これに伴い「肝疾患センター」が設置され、本年4月1日からは、榎本教授(消化器内科教授)の後任として私が担当させていただいております。

昨年度は、多様な患者さんのニーズに、専門的な知識を持って対応できる「肝疾患コーディネーター」の養成のための講座を開講し、2月12日にはこの講座を受講し試験に合格した23名に修了証書授与式を行いました。講座では基礎知識から内科・外科、公衆衛生や医療行政に関する幅広い講義を行い、修了者には地域での充実した活動を期待しているところす。

た、3月4日には、「肝疾患医療従事者研修会」を行い、本年から山梨県立病院の理事長に就任された東京大学名誉教授・山梨県特別顧問の小俣政男先生にご講演いただきました。一方、肝疾患をお持ちの患者さんやご家族、また医療機関の先生方からのご相談に関しましても引き続き対応し、医療情報の提供に努めてまいります。国は、このたびの、医療制度改革や診療報酬改定でも、肝炎対策にさらなる重きをおいています。この要請にも応じ、一人でも多くの患者さんの幸せのために努力したいと思います。今後ともご支援ご鞭撻のほどお願い申し上げます。



肝疾患コーディネーター修了証書授与式

## 平成22年度山梨大学医学部新採用職員研修を終えて

総務課 人事グループ係長(研修担当) 深澤 仁

平成22年度山梨大学医学部新採用職員研修が、4月1日から8日に、研修医、医員、看護職員、病院職員等の136名が参加し、臨床講義棟大講義室等において開催されました。

この研修の目的は、医学部職員としての責任と自覚を養い、早く職場に適応できるよう概要を知ってもらうことにあります。研修では、職種別に各担当者から講義と実習が行われ、職務上必要な知識、技術を修得しました。また、専門講師による患者対応接遇研修では、対人スキル等の講義、

グループ討議では、病院の理念をもとに、一年後の目標と行動指針について活発な意見発表が行われました。

最後にこの研修にご協力いただいた関係者方々に深く感謝申し上げます。



研修の様子

## 文部科学省高度医療人養成推進事業による「冠動脈インターベンション実技講習会」の実施について

「大学病院連携型高度医療人養成推進事業」-南関東・静岡地域を起点とした地域住民に信頼される高度医療人の養成(FUJIYAMA NET)-は、文部科学省採択事業として、平成20年度から、山梨大学を主幹として、浜松医科大学、北里大学、昭和大学、聖マリアンナ医科大学の5大学が連携し、活動を行っています。

その一環として、去る1月15日、16日の両日、テルモメディカルプラネックス(神奈川県)において冠動脈インターベンション実技講習会を開催しました。連携大学から12名が受講し、6名の講師、各大学の病院長、副病院長をはじめとする担当者16名、計34名の参加がありました。聖マリアンナ医科大学の三宅病院長の開講挨拶、オ

リエンテーション、施設紹介等に引き続き、各講師による講義、実際のカテーテルやシミュレーターを用いた実技実習が行われ、休憩時間まで取り組む熱心な受講生の姿がみられました。2日目には、動物を使用した実習が行われ、充実した講習会となりました。

参加者からは、専門医から直接丁寧な指導を受けたこと、時間をかけてカテーテル類に触れ操作できたことや、動物を使った実習で心臓を直接観察できたこと等、有意義な体験ができ次回は是非参加したいと講習への感想が聞かれました。また、講師からも専門教育の新しいアプローチであるとの評価を得ることができ、成功裡に終了しました。



テルモメディカルプラネックス



開講挨拶に続き、講義が行われました



講師の指導によるカテーテル実習の様子

## 看護部新採用職員研修

副看護部長 手塚 とみ江



新採用者は就職が内定し、看護師として勤務するのに多くの不安を抱えています。その不安の多くは、「患者さんに的確な看護技術が提供できるか」「先輩看護師と人間関係づくりができるか」です。そこで、平成22年3月6・7・13日の3日間、看護技術トレーニングを実施しました。研修参加者は59名でした。

①基本的な看護技術を習得する ②入職前の不安を軽減し入職準備をする目的に「点滴静脈内注射・点滴輸血の管理」「輸液ポンプ・シリンジポンプの操作方法」を演習しました。教育委員の副看護部長は、本院の看護基準や手順に基づき、その根拠や起こりうる間違いにどう対処するかを丁寧に指導していました。また、1グループ3名~5名でしたので、研修生個々の疑問に答えながら看護技術を確認できました。

研修生の反応は「実習では看護師がスムーズに実施していたので、理解できたと思ったが、実際に行くと複雑で大変な技術であると実感した」「講義やデモンストレーションを見てからの演習であったので理解しやすかった」「一つひとつの行為に根拠を説明していただき、とてもわかりやすかった」



「今まで演習や実習で体験できなかった技術を実践できたので不安が軽減した」等があり、実際に経験し技術を習得することにより不安の軽減につながりました。また、「先輩看護師がとても優しくだったので病棟に行ってもこんな先輩に教えてもらいたいと思った」「グループメンバーや指導者と話ができて、良い職場環境で働くことができると感じた」等、先輩看護師とも交流し、研修目的が達成できました。

4月にセクションに配属され多くの患者さんに接し、患者さん個々にあった看護ケアを提供できることを期待しています。また、その経過を振り返る時、看護師としての成長が確認できると確信しています。新採用者の成長のために皆さまのよきご指導をお願いします。



シリンジポンプの操作方法を学びました

## 今年も「病院全体が一つのチーム」を目標に！

GRM 古屋 塩美



GRMが2人体制となり、4月に2年目を迎えました。平成21年度のインシデントの発生原因の多くは、確認不足や、コミュニケーションの不足によるところが大きいと考えられます。

各部門内はもちろん、診療科、部署、セクション等の横のコミュニケーションが大切です。そして、そこでは患者さんを抜きに考えることはできません。患者さんも含め「病院全体」だからです。

「安全な医療を提供するために、もっと患者さんに参加してもらおう」そんな思いから、今年度の重点目標として「患者さんとともに安全活動」をあげました。患者さんを開

## よつ葉ルームから「こんにちは赤ちゃん」

3階東病棟 看護師長 花輪 ゆみ子

平成22年2月21日、国立大学病院で初めて設置した院内助産で、第1号の男の子、第2号の女の子が元気に誕生しました。出産されたお母さん方からも満足の言葉をいただき、スタッフ一同感激するとともに、ほっとしました。昨年11月26日に病院長をはじめ、ご協力いただいた方々に見守られる中で開設できたことを本当に感謝しています。



よつ葉ルームではじめての赤ちゃん

院内助産システムとは、助産師が中心となって妊娠から出産まで、ご夫婦のバースプランに沿って継続的なケアを提供していくシステムです。妊婦さんが本来持っている

産む力」と赤ちゃんが持っている「産まれる力」を最大限に活用し、私たち助産師が手助けすることで、安心・安全・満足な「お産」を支えていきます。「よつ葉ルーム」と命名したのは、妊婦さん、ご主人を中心としたご家族、赤ちゃん、そして、私たち助産師の4つのハートで命を支えるという意味をもちます。大学病院は、ハイリスクの妊婦さんが高度医療のもと出産する施設でもあり、希望される全ての妊婦さんが「よつ葉ルーム」でお産が可能ではありませんが、医師と協働して、2人の命をしっかりと守り、満足できる「お産」の提供を目指していきたいと思ひます。今後も妊婦健診を助産外来で受診しながら「よつ葉ルーム」でのお産を予約していただいている妊婦さんと共に、新しい命と家族の誕生に貢献していきたいです。

そして、安全な医療の提供のためには、安全な状態を保つことも必要です。5Sも引き続き実践していきましょう。

これらの目標を達成させるために、特別講演会を2回(いずれも感染対策と共同)、他の部署の取り組みを聞き参考にしてもらうための報告会を2回、他部門・他部署・他職種の職員と実際のインシデント事例をもとに話し合う事例検討会を4回、研修として計画しています。今年度も年間10点の取得を目標に、多くの方に研修に参加していただきたいと考えています。

## 平成21年度大学病院情報マネジメント部門連絡会議に参加して

MEセンター 臨床工学技士 長嶺 博文

1月21日、22日に岡山コンベンションセンターにおいて開催された、平成21年度大学病院情報マネジメント部門連絡会議で、病院を代表しMEセンターから2名が発表しました。「大学病院情報マネジメント部門連絡会議」は、学会とは異なり、各部門(看護部・薬剤部・病院経営管理部・MEセンターなど)各職種が一堂に会し率直に意見の交換を行う場で、温かい雰囲気のもとで和やかに有用な情報交換ができたと思ひます。

今回は、医療機器管理部門で「山梨大学医学部附属病院における医療機器(ME機器)管理」という題名で発表してきました。本院では平成21年8月に機器管理システムを導入し、各種医療ポンプ、生命維持管理装置(人工呼吸器)などを中央的に管理し機器の点検・更新に貢献しています。今後はWebを利用し、病棟や外来の端末から機

器の貸し出し・返却依頼を行ったり、機器の在庫状況なども閲覧できるシステムを構築し、さらには、修理依頼も端末から行えるようにしたいと考えています。現在の所機器の保管スペースが狭いため、一部の機器は病棟の器材庫などに保管してある状況ですが、今後は中央管理機器の種類を増やし、もっと充実した中央化に向け日々向上してまいります。また、MEセンターの活動目標の一つでもある「安心して使用できる医療機器の貸し出し」の通り、使用時には万全のコンディションの機器を使用していきたいと思ひます。



## 放射線部機器更新について

— 最先端 X 線 CT 装置の導入 —

放射線部 副部長 佐野 芳知

平成21年度は放射線部の懸案でありました老朽化した X 線装置の幾台かが更新されました。昨年9月に血管撮影装置が X 線 CT と一体化した IVR-CT 装置に更新され、本年2月に骨塩定量装置、3月に入り歯科用 X 線装置と X 線 CT 装置2台が更新されました。全ての装置が時代の最先端技術を搭載した機器であり、今後の放射線検査に大きく寄与することは間違いありません。

IVR-CT 装置は、従来の様に患者さんを移動させることなく血管造影と CT 検査が同一の部屋で検査可能となり、検査精度や安全面が格段に向上いたしました。骨塩定量装置と歯科用 X 線装置はアナログ装置からデジタル装置に更新し、フィルムレス運用が可能になりました。CT 装置は 320 列と 64 列のヘリカル CT 装置2台を導入致しました。320 列マルチスライス CT 装置は現在世界で最先端の CT 装置で、脳や心臓を多時相で捉える事が可能であり 160mm のエリアを 0.35 秒のスキャンで 1 回転し臓器の微細構造を表現できます。脳神経外科領域、循環器領域での活用が大いに期待されます。また、同装置はヘリカルスキャンが 160 列で撮影可能であり、多くのアプリケーションソフトを搭載していますので体幹部・四肢

など全身の検査にも有用性が非常に高い装置です。

放射線部の今後の課題は、CT 検査待ち日数の短縮と、残されたアナログ装置(X 線テレビ)、経年変化の激しい放射線治療装置、核医学検査装置、心臓血管カテーテル装置等の更新と考えています。

今後とも、放射線部の運用にご理解とご支援をお願い申し上げます。



最先端 X 線 CT 装置「Aquilion ONE」

## ものづくり交流会 簡易型下肢運動機器について

リハビリテーション部 理学療法士 八木野 孝義

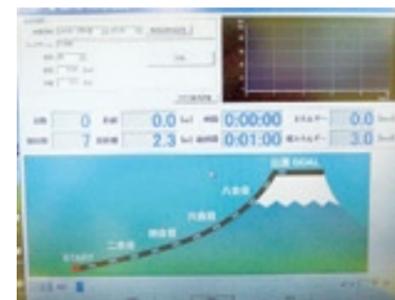
日頃、入院中の廃用性症候群の患者さんの早期離床に結びつけるような運動機器ができればと考えており、平成19年の第4回ものづくり交流会で簡易型下肢運動機器の提案をさせていただきました。

ポイントは①軽量なため持ち運びが容易でセッティングも簡単、②単純な運動様式、③患者さんのモチベーションを高めるための工夫、の3点を挙げました。その後の分科会には多数の企業が参加し、その中から(株)共和電業と共同研究契約を結び機器の開発を行って来ました。平成21年に倫理委員会の承認を経て臨床試験を行い、昨年末に研究が終了致しました。

運動機器についてですが、簡単に説明すれば、ゴムバンドを患者さんに蹴ってもらいノートパソコンの画面に

回数、距離、時間、また距離に応じ山を登っていく表示が出る機器を作製しました。臨床試験では10名中6名が、1ヶ月までに立ち上がり自立となり、使用した感想も「楽しんで出来た」と好評でした。本機器の適応としては、ADL 評価のバーサルインデックス 25 点以上で、完全介助からやや改善してきた頃が動作の改善に有効でした。改良点として、「対象者が高齢の方が多いため、画面表示を大きくして欲しい」また、「動力部について、もっと着脱しやすいほうが良い」など看護師からの助言もありました。

商品化についてはまだですが、デモ機がリハビリテーション部にありますので、興味のある方は八木野までご連絡ください。



成果が目に見える画面表示



訓練の様子



開発したデモ機

# 処方せん記載方法の変更について

薬剤部長 小口 敏夫

処方せん記載方法の不統一による情報伝達エラーを防止するため、処方せんの記載方法の見直しが検討され、平成22年1月に内服薬処方せんの記載方法の在り方に関する検討会より「内服薬処方せん記載の在るべき姿」として報告書が取りまとめられ厚生労働省から示されました。今回の標準化案では、内服薬の分量の記載を「1日量」から「1回量」に変更することが最も重要なポイントです。

これまで、内服薬処方せんの「分量」については、内服薬では1日量が、頓服薬の場合は1回量が記載されていました。今回の新ルールでは、注射薬等と同様に、服薬・投薬行為の最小基本単位である1回量が処方せん記載の基本となっています。また、標準化案には、「薬名」については薬価基準に記載されている製剤名を記載すること、散剤・液剤については製剤量を分量記載の基本とすること、「用法・用量」における服用回数・服用のタイミングについては「3×」「×3」等の紛らわしい記載を避けることなどが示されています。

今回の処方せん記載方法の変更については、医療安全の観点からの指針として示され、関係者は可及的速やかに標準化に向けた方策に着手すべきとされています。従って、従来の記載方法から新ルールに従った方法への移行期間では、記載方法の異なる処方せんが混在することになり、そのことが医療過誤を誘発する要因として問題視されています。過渡期における混乱を最小限に留めるよう、関係者に対する周知徹底を速やかに図ることは重要であり、さらに医学部における教育や卒業教育においても新ルールを踏まえての教育を実施する必要があります。

本院での処方オーダーリング入力および出力処方せん様式については、システムの関係上、当面の間は従来のままととなります。調剤薬局への情報伝達エラーを防止するため、処方せんに「内服薬は頓服薬を除き1日量で記載している」旨を付記するなどの対策を現在検討しております。なお、報告書の全文は、厚生労働省のウェブサイトをご参照ください。(http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/01/dl/s0129-4a.pdf)

## 山梨大学再発見

## ワイン科学研究センター

### ワイン科学研究センター長 柳田 藤寿

#### ワイン科学研究センターの歴史

ワイン科学研究センターは、果実酒を専門に研究するわが国唯一の研究機関として、昭和22(1947)年、山梨大学工学部の前身である、山梨工業専門学校に、附属発酵研究所として設置され、昭和25(1950)年、学制改革に伴って山梨大学工学部附属発酵化学研究施設と改称されました。発足当時は、山梨県の特産品であるワインの品質向上を目的として、ワインに関する微生物学的並びに醸造学的な基礎研究を地域と密着して行ってきました。その後、改組を行い、平成12年度から発酵化学研究施設を廃止し、ワイン科学研究センターを新設しました。平成20年4月には、山梨大学大学院医学工学総合研究部附属施設となりました。わが国のワイン産業の発展に伴い、現在は全国的な視野で、幅広い方面からワイン醸造やブドウ栽培等の研究を行っています。

当研究センターには、3つの研究部門、発酵微生物工学研究部門、機能成分学研究部門、果実遺伝子工学研究部門があり、さらにブドウ育種試験地およびワイン試験工場を持っています。各研究部門の研究内容は、発酵のための有用ワイン酵母や有用乳酸菌の検索とそれらの醸造学的特性に関する微生物学的研究(発酵微生物)、ワインの色調と香味に関する化学的、官能学的研究(機能成分)、ワイン用ブドウの生理・栽培に関する研究(果実遺伝子)を行っています。

#### 山梨大学ワイン

当研究センターが開発した技術をもとに醸造されたワインを地元ワイナリー4社と共同して山梨大学のロゴを入れ、山梨大学ワイン12種類として販売しています。売上の数%は大学に還元されます。この中で特に評判がいいのは、世界初の海洋酵母ワインと山梨大学開発品種で造ったヤマソービニオンワインです。



ワイン科学研究センター



海洋酵母ワイン(右)と大学オリジナルのヤマソービニオンワイン